

月経困難症治療の現状と展望について

—低用量エストロゲン・プロゲスチン配合薬(LEP製剤)を中心に—

東京女子医科大学産婦人科学 非常勤講師／稚枝子おおつきクリニック 院長

武者 稚枝子 先生

単に「生理がおもい」とされ、見過ごされてきた「月経困難症」。近年は、疾患として認知度が上昇し、その第一選択薬の一つである低用量エストロゲン・プロゲスチン配合薬(LEP製剤)も、いわゆる「避妊薬」としての役割だけではないことが浸透しつつあります。ただし、いまだLEP製剤に抵抗を感じる方も少なくありません。これらを踏まえ、東京女子医科大学産婦人科学 非常勤講師、稚枝子おおつきクリニック 院長の武者稚枝子先生に月経困難症治療の現状と展望について、LEP製剤を中心に話をうかがいました。

低い婦人科の受診率

Q 月経困難症の症状を訴える女性が多いのに、婦人科の受診率は低いと言われます。

A 月経困難症で悩んでいる女性が多いのですが、婦人科の受診率は低く、症状のある患者さんの受診率は約20%という報告¹⁾もあります。受診率を上げる一つの方法としては、まず「教育」が大切と考えます。学校での保健体育や性教育の授業などを通じて、生理痛がひどいことは「月経困難症」という疾患であることを伝えます。我慢することは美德ではなく、鎮痛薬だけで様子を見ていたら、その後に子宮内膜症を発症して不妊症にもなってしまうこともあります。また、月経困難症の背景に子宮筋腫や内膜症、卵巣嚢腫などの疾患が隠れている場合もあります。こうした話を

男女問わず理解してもらうことが大切です。

私は駅近くでクリニックを開業していますが、開業当初は「婦人科は普通目立たない裏道にあるものでは」と言う高齢の方もいました。婦人科は人目を忍んで中絶をしたり性病を治す場所というイメージがあったのかもしれませんが、しかし今では、「頭のとっぺんから足のつま先まで」気になることを何でも相談できる場所として認知されるようになりました。よろず相談所か学校の保健室のような存在でしょうか。また、更年期障害や子宮がん検診などで来院された方が、お母様や娘さんなどに受診を勧められて来院されることも大変多いです。

このように、医師自らが婦人科の敷居を低くする努力も必要です。近年、医学が専門化していますが、婦人科疾患だけでなく女性のライフサイクルを理解し、身体的・精神的な悩みを何でも相談できるようなパート